

# 参加青年代表報告

平成29年度 日本青年中国派遣

## 中国との交流事業を通して学んだこと

この度、第39回日本青年中国派遣団の一員として、平成29年11月14日から25日までの間、中国を訪問させていただきました。

今回、この事業に応募することを決めたのは、私自身が中国に興味を持ち、より深く中国について知りたいと思ったからである。

私は、普段、日本に住む外国籍の方に日本語を教えるボランティア活動を行っている。ボランティア活動では中国人に日本語を教えることが多い。実は、私は高校生のときに一度中国を訪れたことがあるのだが、それ以来は、特段中国という国に対して関心を持つこともなく生活していた。しかし、ボランティア活動における中国人の方々との会話や、彼らが日本の社会に早く溶け込もうと忙しい合間を縫って語学の取得に励む姿勢を見る中で、私自身再び中国に対して興味を抱くようになっていた。

また、私は、地域住民の方々と日頃から近い距離で接することが多いが、それゆえに物事を狭い視野で捉えがちになっていると感じていた。私は、今回の事業を通して中国という日本とは異なる国について知ることで、何か新たな気付きを得られればと思い、この事業に応募することを決めたわけである。

ここでは、今回の事業の中で学んだことを主に4点記していきたいと思う。

まず一つ目に学んだことは、言語、言葉の大切さである。

最近は翻訳アプリなどが増えているため、互いに共通言語がなくてもそれらのアプリを利用することでコミュニケーションを取ることは可能である。実際に派遣中も、現地の方々と互いに意思を伝え合うため、スマートフォンの翻訳アプリを何度か使用した。しかし、アプリの翻訳機能は必ずしも私たちが意図することを正確に伝えられるわけではない。やはり、人間同士が円滑にコミュニケーションをとるためには言語の壁を乗り越える必要があると感じた。

派遣中に言語面でもどかしさや悔しさを感じたのが、

ホームステイのときである。ホストファミリーと私たちの間に共通言語はなく、日本語のできるホストファミリーの友人がいないときには、おいしいとかうれいなどの簡単な表現を伝えることにさえ苦勞した。ホストファミリーが快くもてなしてくれ、声をかけてくれるたびにそのときの私自身の感情を伝えたかったが、言葉にできず、翻訳アプリを使ってもうまく伝えきれず、相手には表情で訴えることしかできなかった。確かに、表情等でも相手に思いを伝えることは可能かもしれない。しかし、表情だけでは不十分であり、やはり言葉があってこそそのコミュニケーションなのだ改めて感じた。この経験から、今後は、私自身、もっと語学の向上に力を入れて努力していきたいと思った。

二つ目に学んだことは、健康に対する意識である。

今回の派遣中、中国の高齢の方々が至る所で体を動かして、運動をしている姿を目にした。そして、そこからは中国の人々の健康に対する意識の高さが伝わってきた。中国の人たちの健康への意識の高さを特に感じたのは、北京で朝の自由時間に天壇公園内を散歩していたときである。朝も早く、かなり冷え込んでいるにも関わらず、たくさんの方が、公園内で太極拳をしたり、日本という蹴鞠のようなものをしたりして運動をしていた姿からは、中国の人々の活力が伝わってきた。天壇公園以外でも、ホームステイ中に行ったコミュニティスペースにおいて、高齢になられた方々がダンスや卓球をして楽しそうに体を動かしていた光景は、私に対していい意味で衝撃を与えてくれたように思う。確かに、日本のように年齢を重ね健康でなくなった後にも手厚いケアをもらえるような体制を整えることは大切である。しかし、根本的には中国の方々のように、健康でいられる期間が長くなるよう、人々が意識を高く持って生活していけるようにすることの方がより大切なのだと感じる事ができた。

続いて、三つ目に学んだことは、国というものは各地域の集合体として形成されており、その地域ごとに違いや特色があればあるほど一国として面白みが増し、魅力

的になるということである。今回の派遣では、北京、貴州、広東に行った。各々の地域で気候や食文化、発展のスピードが違って中国の様々な面を知ることができたように思う。気候ということに関していえば、同じ寒いでも北京と貴州の寒さには違いがあるような気がしたし、広東は北京や貴州に比べてかなり暖かく、吹いている風も違って思うように思えた。また発展のスピードということに関していえば、北京や広東の街中の至る所で見られたシェアバイクは、貴州ではほとんど見られず、そうした点からも貴州はまだ成長の余力を残している、発展の度合いでは北京や広東とは異なっていることを感じた。そして、個人的に各地域の特色や違いを最も感じることができたのは料理についてである。北京、貴州、広東で出された料理には、それぞれ味付けに違いがあり私の口に合うものもあれば、合わないものもあった。中華料理ということで、これまで一くりにしか考えてこなかった中国の料理に対する概念が変わると同時に、一国の中でこれほどまでに味付けの仕方や料理の種類に違いがあるのかと大変驚かされた。どこに行っても同じようなものしか体験できないのでは国として面白みに欠ける。各々の地域が、その地域に合った特色を大切に前面に出していくことで、国としての魅力が増す。このような当たり前のことに再度気付くことができた。

学んだことの四つ目は、自分の価値観でばかり物事を判断せずに広い視野で相手の価値観を考慮しながら物事を捉えることの大切さである。例えば今、日本は多くの観光客を海外から呼び寄せようとしている。そして更なる観光客を呼び込むために新しい観光地等の開拓にも力を入れている。私は今まで、新しい観光地として一体どこが良いかと聞かれたとき、自分が知っている、自分なりに素晴らしいと思う場所を挙げてきた。しかし、それは自分の価値観を基にした単なる思い付きの場所であり、そこには海外からの視点や海外の人たちの日常から考えてわざわざ日本を訪れることへの考慮がなかったように思う。今回、中国の様々な地を訪れ、中国の人たちを始めとする外国の方々の日常や目線が日本とは異なることを認識し直すことができた。私は今後、このような中国で学んだ視点や考えを大事にして、自らの住んでいる地域がその特色を大切にしながら発展していくことができるように知恵を出していきたいと思った。

上記が学ぶことのできた主な4点であるが、他にも、今回の事業を通して、沢山の尊敬できる人たちに出会えたことは私にとってとても大きなことであったように思う。当然中国からは刺激を受けたし、中国で出会った学生、ホストファミリー、北京から広東の最後まで同行し

てくれた中華全国青年連合会の関係者等沢山の人たちからいい刺激を得られた。しかし、私に新しい気付きや刺激を与えてくれたのは何も中国の方々ばかりではない。私は一緒に中国で時間を過ごした派遣団のメンバーからも沢山のことを学べたように思う。

今回の団は準備期間が短く事前研修期間も例年に比べ大幅に短かったようである。そんな中、派遣に向けて各団員が自分たちに割り当てられたことを必ずやり遂げ、それにプラスして困っている団員がいれば手助けしようと活動に取り組んでいた姿勢は、団員の中でも年長の私にとって、とても頼もしく感じられた。団のメンバーを見ていて最も感心させられたのが、中国という国を尊重する姿勢である。他国を尊重するというのは、非常に難しいものだと思っている。何をすれば尊重していることになるのか、そこに正解なんてないのかもしれないが、今回の派遣を通して団の皆が何かあればすぐにメモを取り、沢山の質問を現地の方々にぶつけていた姿はとても素晴らしく感じられた。メモを取るということも、質問をするということも相手国に興味があり、相手国をより知りたいと思うからこそできるものである。そして、そうした知りたいという気持ちが相手国へのリスペクトにつながり、国際交流の場、もっと大きく言えば人間同士がつながりを持っていく上では最も大切なのだと感じることができた。私は、派遣団のメンバーが気付かせてくれた相手をリスペクトすることの意味を噛みしめながら、今後日々のボランティア活動や地域の方々への対応業務を行っていきたいと思う。

今回の事業では、中国はもちろんのこと日本や自分自身についてもより深く知ることができた。既に記したが、今後はこの経験を日々のボランティア活動や業務においていかしていきたい。自分の価値観が絶対とは思わず、そうかといって周りのことばかり気にし過ぎずうまくバランスをとりながら各々の特色を捉えること。そして、相手に興味を持つこと。これらを意識することでボランティア活動も業務もより良く行っていくことができると思う。

この事業で、感じ、考え、学び、噛みしめた全ての経験が私の宝物になった。私は、この経験を大切に今後も日々努力し続けていきたい。

最後に、迎えてくださった中国の方々や一緒に時間を過ごした派遣団のメンバーなど、この事業に関わってくださった全ての方々に心から感謝を申し上げたい。

## 結～日中友好の橋を世代代に～

近年世界で大きな存在感を持つ中国・しかも日本の隣国にある中国を自分の目で見てみたい、という思いで本事業への参加を決意した。

私は2016年から約9か月間アイルランドに留学した。そこでは、世界の広さを実感し、学んだことが多くあった。同時に、日本やアジアへの関心が高まった。ヨーロッパで生活していると、日本人は中国人や韓国人と同じアジア人として一括りにされることが少なくなかった。アジアのことはアジア人である私に聞けば分かると思う人もおり、質問をされるたびに自分の無知を知った。また、アジア人と一括りにされることにも違和感があった。身近にある国々を知りたい、とりわけ経済的・政治的に世界に大きな影響を与えるようになった中国についてもっと知りたいと思うようになった。

12日間という短い期間ではあったが、中国を様々な面から見ることができた。中国の発展の勢いを目のあたりにした。また、中国側のもてなしに感動したり、日中の文化交流の密接さに気付かされたりした。

### 勢いある中国と課題

中国の発展の勢いを目のあたりにした。街並みを眺めるだけでもユニークな高層ビルが立ち並ぶ。大規模な建設工事も進められている。今回の派遣には「起業」がテーマに据えられていた。大企業や起業を支援する施設などを訪れたり、各都市の学生と起業についてディスカッションをしたり、新しいものを創造しようとする人と交流する機会が多かった。騰訊会社（テンセント）や大疆創新科技有限公司（DJI）などの企業をはじめ、学生や学校を卒業したばかりの青年が非常にレベルの高い製品やシステムを開発しており、とても驚かされた。自身の開発品に対する自信や創造意欲の高さもある。日系企業もまた、中国独自の開発を進めている。

これまで私は、中国が急成長したのは豊富な労働人口のおかげだと思っていなかった。実際には高い技術も要している。労働力に頼り切っているのではなかった。先進国から技術を学び、応用しているからこそ成している成長なのだと感じた。中国から学べることもあり、日本も刺激を受けている。それでもなお、日本は中国にはない良さを持っていると思う。日中がそれぞれの良さをいかしながら、お互いに刺激し、学び合って両国が発展してほしい。

そして、急速な発展と同時に、貧富の格差や少数民族について考えさせられた。立派な建物のすぐそばには

古びた建物も多くある。その中でも貴州は経済格差が目立った。発展している地域と依然貧困を抱える地域との差の大きさが印象的だ。

貴州省は、人口に占める少数民族の割合が約3分の1である。貧困問題を抱える貴州省は、少数民族を観光資源として注目している。民族独特の文化をアピールすることで、観光客が多く訪れるようになった。そして、観光収入が増えることにより、経済的に豊かになってきた。また、文化を商品化することがある意味で伝統の継承にもつながる。少数民族を観光業として発展させることは、伝統継承や格差問題解消への一つの方策であろう。しかし、気になることがある。以前は静かに暮らしていた民族の生活圏内に、多くの観光客が訪れるようになった。こういった生活環境の急激な変化について、少数民族はどう思っているのか本音を聞いてみたい。また、観光業に従事するのは一部の人であり、子どもなどの家族を残して大都市に出稼ぎに行く労働者も多く課題が残る。貧困問題解決に力を入れる中国が、これからどう対処していくのか注視したい。

### 温かいおもてなし

中国滞在中、至る所で温かいおもてなしをしていただいた。特に印象深いのは貴州でのホームステイである。

私はもう一人の団員と共に二人で一つの家にお世話になった。私ももう一人の団員も中国語を話せないことに加えて、ホストファミリーやその友人たちは英語も日本語もほとんど話せない。共通言語がなく不安だったが、ホストファミリーたちは笑顔で接してくれた。通じているかわからない英語、ジェスチャー、覚えただけの中国語、そして翻訳アプリを駆使してなんとかコミュニケーションをとった。言葉が通じないながらも私たちを精一杯もてなそうとしてくれていることが伝わり、その優しさに感動した。

先日連絡がきて、来年日本への旅行を決めたらしい。また再会できると思うとわくわくする。今度は、私がおもてなす番だ。喜んでもらえるように精一杯尽くしたい。

### 日本文化と中国文化のつながり

長い歴史と交流の中で、中国から日本にもたらされたものが多いと改めて実感した。

日本の文化を紹介したいと思い、ホームステイ先に茶道具を持っていった。簡略した手前だが、抹茶を立てた。ホストファミリーやその友人たちは大変喜んでくれ



て私も嬉しかった。そして、ホストファミリーは中国茶道を披露してくれた。とても驚いた。なぜなら日本茶道と共通する点が多くあったからだ。茶碗を清め温めるために一度お湯を入れる動作があったり、道具や相手に対して敬意を払ったりと、日本の茶道にもある作法が何度も見受けられた。また、ホストファミリーの趣味の一つに書道があった。ホストマザーは異文化体験として、私たちに書道を体験させてくれた。しかし、実際のところ、書道は日本人にもなじみがある。私もこれまで日本文化として海外の人に紹介することが多かった。

こういった文化交流を通して、茶道においても書道においても、また食文化や漢字などにおいても、これまで日本文化が中国文化の影響を大きく受けてきたことを実体験として感じる事ができた。

日本も中国に文化的な影響を与えている。WeChatで連絡先を交換した友人たちとは、帰国してからも連絡を取り合っている。内容は、歌手やドラマの話など、他愛もないことがほとんどだ。数時間前に日本で放送されたばかりの音楽番組やドラマについて話すのは不思議な気分だ。日本の番組がほぼ同時に中国でも視聴できると知って驚いた。日本に特別な興味がない人でもドラえもんを知っていた。ドラマやアニメ、音楽など日本のポップカルチャーが中国に浸透している。

日中の交流の長い歴史を感じた。日本も中国もお互いに影響し合って文化が発展してきたことを学んだ。

## これからのこと

世界で大きな存在感をもつ中国を自分の目で見たかったため、この事業に参加した。私のイメージを超える発展をしていた。そして、日本と中国の交流と相互理解の重要性に気付いた。

12日間で4都市を訪れた。中国と一言で言っても、都市によって人によって個性がある。これまで中国を一つの国としてマクロな視点でしか見ていなかったが、一人一人を思い浮かべられるミクロな視点も持てるようになった。私がこれまでイメージしていた中国は一部分だった。もっと知りたい・深めたいという好奇心が高まった。マクロで見るから分かることや、ミクロで見るから分かることがある。両方の視点を大切にしたい。

中国語の学習も始めてみようと思う。共通言語がなくても、翻訳アプリである程度のコミュニケーションをとることができ、便利な時代だと感心した。一方で、目の前に相手がいるのに機械を介さなければならないことに寂しさを覚えた。世界共通語とされる英語だけでも良いときが多いかもしれない。しかし、中国を訪れて、彼らのことを知りたい、親交を深めていきたいと、中国の人の顔を思い浮かべながら思うようになった。英語学習と並行して、彼らが話す中国語の勉強も始めることにした。

国際情勢に目を向けてみると、世界の様々な所で紛争やテロが絶えない。日本もまた近隣の国々と様々な課題を抱えている。どんなに願っても平和な世界なんて訪れないのではないかと思うこともあった。しかし、こんな不安定な世界でも、平和にできるという希望を与えてくれるものがある。それは、派遣で出会った中国の方たちの笑顔である。彼らは笑顔で私たちをもてなしてくれた。おかげですぐに打ち解けた。この出会いを大切に、友情をより深めていければ、より良い社会に向けて協力し合える関係にできると感じた。また、嬉しいことに、つい先日、中国での日本人に対する印象が改善しつつあるという世論調査の結果が公表された。政治的に大きな課題を抱えて日中関係が冷え切ったことがあっても、継続した交流の成果だと思う。私も交流を続けていきたい。

今回の派遣は、各地で中国青年と交流の機会があった。産業において高いスキルと勢いを持つ中国、社会が抱える課題とその解決に向けて取り組む中国を見た。個人的には、純粋に楽しい時間を過ごした。日本代表青年としては、社会のために何をすべきなのか・何ができるのかを考えることができた。事後活動にも積極的に参加するなどして、さらなる友好関係を築いていきたい。身近にいる人たちにも友好の輪を広げていきたい。また、私は来年度の4月から教員として学校教育に携わる。世界で何が起きているのか、どのような世界になっていくのかに関心を向ける機会や、中国を始めそれぞれの国に住む一人一人の人にも目を向ける機会をつくらうと思う。この派遣で学んだことを子供たちに伝えるつもりだ。

また、学んだことの一つに、自分の目で見て感じて考える大切さがある。メディアが伝えることが嘘と言いたいのではない。しかし、どうしても切り取られた情報になってしまう。この報告書も切り取ったものと言えるだろう。一部の情報だけでつくった固定概念にとらわれずに、物事を広く見て判断したい。

## 「結～日中友好の橋を世代代に～」

私たち39団のスローガンだ。日本と中国、日本青年と中国青年、私と中国で出会った友人、私の友人と中国の友人、私達世代と後世、現在と未来などなど、大切にしたい結びが沢山ある。今回の派遣は、日中友好のためのきっかけなのだとし強く感じた。本事業で得たことをこれからの生活につなげ、日中の友好のために行動していく。

## 日本・中国青年親善交流事業を終えて

去る11月14日から11月25日にかけて、日本・中国青年親善交流事業が行われた。私にとって初めての訪中で、今回のプログラムでは北京、貴州、深圳、広州を訪れた。訪中前は、中国は私にとって「近くて遠い国」であったが、このプログラムを通じて様々な友人ができたことで、以前よりも近い国になったように感じる。今回のプログラムでは、様々な中国の企業、大学、施設を訪問した。今回の訪中で私が感じたこと、学んだことを、主に政治・経済・文化という三つの側面から述べていきたいと思う。

### ・政治

まず初めに、政治という観点から述べる。今回の訪中を通じて感じたのは、中国の政治システムは非常に良くできているということである。急速な社会インフラの建設、国内産業の育成による巨大IT企業の出現など、中国だからこそできた政策は多い。共産党による一党独裁という言葉は日本では否定的なニュアンスで捉えられがちで、私も政治システムとしては先進国のそれとは言えないのではないかと考えていた。しかし、様々な施設の訪問や全青連の方との交流を通じて、中国の政治システムは、意思決定の速さなど日本とは違った強みを持っているということに気付いた。日本と中国の政治の仕組みは全く異なっていて、どちらも一長一短がある。そしてどちらかが良い、悪いというわけではない。当然といえば当然のことであるが、ほとんど無意識的に、日本と違うというだけで、中国の政治システムに対してネガティブな印象を持っていたように思う。そして、今回の訪中を通じてより客観的に、中立的に、中国という国を捉えることができるようになった。自国にいながら情報を得ると、どうしても自国を基準に情報を判断してしまいがちで、この感覚は実際に現地に行くことでしか得られないものだと思う。

### ・経済

経済という観点から述べたい。今回の訪中では、中国における起業事情を知ることが私の中の一つのテーマであった。事前研修等で、日本の起業の現状について調べてから中国の起業について視察すると、二国間の違いなどを相対化して見ることができた。

印象深かった経験をいくつか述べたいと思う。貴陽では、貨車幫有限公司という企業を訪問した。その会社

は、運送業者と、荷物を運んでもらいたい企業とを、スマートフォンを利用してマッチングするアプリの運用を行う会社だったが、創設して数年とかなり若い企業であった。かなり複雑なシステムであり、構築・運用にかなりのコストがかかるはずであるが、アリババ等の中国の成功したベンチャー企業による資金支援があるようで、ベンチャー企業でも資金調達がそこまで難しくないということが感じられた。同様に、広州の中山大学にて学生が、「いいアイデアさえあればベンチャーキャピタルなどからお金を集めるのはさほど難しい。」と話していたのが印象的で、ベンチャー企業が資金繰りに困る日本との違いを感じた。また、北京大学の学生との交流の中で、中国では、起業した人は失敗を恐れずにチャレンジした人ということで高く評価され、仮に失敗しても転職先に困ることがあまりないということを知り、中国での起業に対するハードルの低さを感じた。彼からはまた、起業の際には自己資金ではなくアイデアに賛同してくれた企業やベンチャーキャピタルから資金提供を受けることができるので、失敗しても借金を抱えるリスクが少ないということも聞いた。一方で、日本と共通しているのは、公務員や大企業など、就職先のキーワードとして安定が上がることである。私は中国では今起業ブームが起きていて多くの学生が起業を志していると思っていたが、それは一部の学生の間だけのようで、私たちが議論した北京大学の学生は、文系ということもあってか起業を考える学生はいなかった。ただし、日本と比べると中国では起業が一つの選択肢となりやすいのは確かであり、それは中国国内の雰囲気や、転職の容易さ、起業のハードルの低さに起因していると感じた。中国では次々とベンチャー企業が生まれては潰れ、成功した一部の企業に憧れて起業を志す学生が現れる。そのような学生に対して成功したベンチャー企業が積極的に資金提供を行うという好循環が生まれている。既得権益や法規制が元々なく、ゼロから作り上げている段階の中国でのベンチャービジネスと、既にある程度安定した社会が形成されている日本でのそれを一概に比較することはできない。もし、貴陽で見学した貨車幫有限公司のような企業が日本でできると、日本の大手運送会社が不要になってしまうことになるので、日本ではそのような仕組みを作るのは難しい。しかし、中国政府の支援策やベンチャー企業を支援する仕組みは日本にとって学べる所があると感じた。

また、中国の人々がほとんど現金を使わないこと、wechatpayやalipayなどの電子決済で会計をほとんど済ませていることにとっても驚いた。実際、ホストファミリーや交流した大学生は皆、最近現金を使ったことがないと話していた。貴陽でのホームステイの際にも、最後までホストファミリーが現金を使っているところを見なかった。どちらかと言えば田舎と言われている貴陽においても電子決済が一般的なことから、中国で電子決済が良く普及していることが感じられる。他に、街中にシェアバイク（共用の自転車）が至る所に置かれていることがとても目についた。今回の訪中で感じたのは、中国人は新しいものが好きなのか、新技術に対する人々の抵抗感が日本よりも低いようで、最先端の技術を使ったシステム、例えば電子決済やシェアリングエコノミーなどの普及のスピードがとても速い。何か新技術があると、日本では、まずその安全性などが議論されて実行までに時間がかかるが、中国では、便利だからとりあえずやってみよう、という話になる。ベンチャー企業が社会に根付きやすい土壌と言うべきか、そのようなものが中国にはあるのではないかと感じた。

## ・文化

最後に、文化という側面から述べたいと思う。私たちは、今回の訪中の中で、貴陽市においてホームステイを行った。私のホストファミリーは私と同年代の大学生で、二人でルームシェアをしていた。年齢も身分もほとんど変わらないホストファミリーだったので、同年代の中国の学生の考えていることについて深く知ることができたと思う。結論から述べると、中国と日本の学生で考えていることは大きく変わらないということを感じた。日本の大学生はあまり勉強せず、中国の大学生はとても勉強する、というのは訪中前の私たちのイメージであったが、よく勉強する学生もいればあまり勉強しない学生もいる、ということ。休日は何をするのかといえば、友人とカラオケをしたり、家でテレビゲームをする（ホストファミリーは私の持っているゲームと同じものを持っていた）。テレビのニュース等で、ある種の中国人に対するイメージというものを持っていたが、実際に会って話してみると私たちと大きく変わらない。実際に現地に足を運び、現地の人々と交流することで初めてわかることはやはり多いということを実感した。

今回の訪中で個人的に最も心に残っているのがこのホームステイを含めた貴州省での滞在である。それは、中国という国の発展ぶりを特に感じ取ることができたからだと思う。貴陽は貴州省の省都であるが、貴陽の夜の街並みに度肝を抜かれた。高層ビルが立ち並び、イルミネーションが施され、繁華街が人でにぎわっている様子はさながら東京のようで、高層ビルの数で言えば東京

よりも多いのではないかと感じた。貴陽の後に訪れた広州・深圳は中国第3、4の都市ということでこちらも発展ぶりが凄まじく、東京が霞むほどであった。貴陽は確かにその2都市には劣るが、それでも十分な大都市であった。ホストファミリーが、貴陽はまだまだ田舎だよ、と言っていたのがとても印象的だった。実際、少し通りを外れるとあまり整備されておらず、街並みも綺麗とは言えないエリアも存在していて、東京と発展途上国の田舎町の二つの顔を持つ極端さは、中国が未だに発展途上であることを感じさせた。ただ、この国はまだまだ発展の余地を残しているということを見ると少し恐ろしくも思った。

## ・終わりに

以上、これまで政治・経済・文化という大まかな三つの側面から今回の訪中で感じたことを述べた。訪中前に自分の中にある程度イメージがあったが、実際に中国人と交流していく中でそのイメージが変わっていくものが多かった。ある国のことを知りたければその国に行ってみる、まさに百聞は一見に如かずということを実感した訪中だった。

12日間の訪中は長いようで短かった。しかしここで得た経験を事後活動へとつなげていくことが重要である。私は、今回の訪中を通じて多くの中国の友人ができた。彼ら、彼女らと交流することで以前よりも中国に親しみを持てるようになった。日中の友好関係の基礎はこのような個人レベルの交流関係にあると思う。私が訪中団に参加して、中国に親しみを持てるようになったように、多くの日本の若者が中国に対して偏見なく付き合っていくために、このような交流活動の促進に力を尽くしていきたいと感じた。この訪中団で感じたことを多くの人に伝え、多くの人に中国に足を運んでもらうことで、日中の友好関係の発展に少しでも貢献していきたいと思う。



## 結 び

我々、第39回は「～結～ 日中友好の橋を世代代に」というスローガンを掲げて、中国派遣に参加した。このスローガンは、事前研修から出発前研修にかけて全員で決めたものだが、私は「結」という言葉に思いを込めて提案した。この「結」は「もやい結」から持ってきた。もやい結というのは、結びの王様と呼ばれている結び方だ。簡単に結ぶことができるが、ちょっとやさそとでは、ほどけないことからそう呼ばれているらしい。それどころか、双方を引っ張ると、ますます結び目が固くなっていく。今回の中国派遣で私が掲げたのは、このもやい結びを日中両国の青年で実現し、世代代に伝えていくという目標だ。そして、この目標を完全に達成させるには、事後活動がカギとなる。そこで私は、本レポートでは、印象に残っていること、今回の訪中で達成することができたこと、またそのエピソード、それに事後活動をどう取り組み、このスローガンを達成させるのかを述べていきたい。

私が中国を訪れて、もっとも印象に残っていることは、中国の発展のスピードの早さだ。例えば、WeChat Payという電子マネーの普及だ。中国人は財布を持ち歩く必要がないらしい。スマートフォン一つで買い物ができる。そのシステムを普及させたWeChatの会社は騰訊会社（テンセント）といい、深圳に本社を置く。今回我々は、騰訊会社（テンセント）に企業訪問することができた。本社ビルは見上げていると首が痛くなる程、高いビルだったが、もうすぐ本社ビルを移転するという。移転先となる新しい本社ビルはさらに高さを増し、奇抜な見たことのない形のビルをしていた。それもそのはず、騰訊会社（テンセント）は日本にいとあまり馴染みは薄いだが、世界5大企業のひとつだ。残りはアップルやマイクロソフト、Amazon、アルファベットだ。また、騰訊会社（テンセント）の本社がある深圳という町は30年ほど前まで小さな漁港であつたらしい。しかし、面影は一切なかった。超高層ビルが立ち並び、地下には地下鉄が走っている。このスピード感は日本では感じられないものだった。かつての日本もこのようなスピードがあつたのだろうが、中国で自分の目でスピード感を感じることができ、非常に貴重な体験となった。

そして、二つ目に今回の訪中で達成することができたこと、そのエピソードを書いていきたい。中国で達成



騰訊会社（テンセント）を訪問する

したものとして、中国青年との固い結びが挙げられる。このことについて、貴州でのホームステイが特に印象に残っている。貴州の観光名所に連れて行ってくださったり、家庭料理を振る舞ってくださったりした私のホームステイ先は、不動産を経営しているお父さんとお母さん、そして子供の3人の家だった。子供は12歳で、中国語と英語と自己紹介程度の日本語を話すことができたが、ご両親は中国語しか話すことができなかった。私は中国語が話せないで、英語で子供と話し、その子供を介してご両親と会話をした。ただ、子供がいないときは、翻訳アプリを介すなどして、なんとか会話をした。しかし、翻訳アプリの日本語は不自然でわかりにくい。そして何よりも、会話というのは、言葉のキャッチボールというように、リズムカルであることが大切だ。それなのに、翻訳アプリを通す会話は、どちらかが長くボールを持ってしまい、リズムカルとは程遠く、また限られた時間の中で、話したいことが沢山あるが、話せないということが多かった。非常に悔しかった。ただ、このことをきっかけに、中国語を話せるようになると決意し、ホストファミリーのお父さんとも、中国語が話せるようになったら、語り合おうと約束をした。また、子供も日本のアニメに興味があり、日本の秋葉原を訪れたいと言っていた。そして日本に来たとき、是非、日本の案内をさせてほしいという、お父さんが、それは近い将来あるだろうと言ってくれた。ホストファミリーと再会を誓い、またWeChatというツールでもつながり、もやい結ができたと思う。



ホストファミリーと紅葉を見る

もう一つの結びは、大学生との交流だ。我々は北京大学と中山大学の学生とディスカッションや大学案内などで交流をした。日本語学科の学生ということもあって、当然のように、日本語でコミュニケーションができたが、驚いたことに、単に言葉だけでなく日本の社会問題について我々日本人と話し合えるくらい日本について詳しくだった。具体的に私は、核家族問題について話し合った。中国では、自分の親の面倒は自分で見ることが当たり前とされていて、老人ホームなどの施設に自身の親が入ると、近所の人や親戚から冷酷な子供と見られるのが普通であるらしい。しかし、日本ではそのような見方をされず、老人ホームに人気があるのは、なぜと聞かれた。中国でも核家族が多くなってきているが、日本のように老人ホームに入れないので、日本に興味があるようだった。私は大学で福祉を専攻していると話したら、一緒に中国でも入りやすい老人施設を考えようと言われた。中国はこれから高齢化社会を迎えるに当たって、非常にチャンスだと教えてもらい、私は日本での宿題とし



北京大学の学生と交流する

て持ち帰った。その方とは今もWe Chatを通じて会話をしている。

この二つ以外にも様々な方と友人になり、再会を誓い、WeChatでつながることができた。そして、帰国後もこの友好を絶やさず、さらに深めていき、その友好の輪を広げていくことが日中友好に大きく関わり、目標つまりこの事業の成功と言えるのではないかと考える。そのために、WeChatでまめに連絡を取り合うことが重要だと思う。また、3年後の東京オリンピックは友好の輪を広げるのに、格好の機会だと思うので、しっかり事前に準備をして、逃すことのないようにするつもりだ。事前の準備とは、やはりまずは言語を習得することである。今回の訪中で学んだことだが、確かに文化交流は、ボディーランゲージや、単語の中国語、英語、また通訳アプリを駆使すれば、なんとかすることができた。通訳アプリは今後、東京オリンピックまでにも、さらに実用的になると思われる。しかし、それでも中国語を話せることは、より深く交流するには、必要なのではないかと考えた。親近感もさることながら、相手が自国の言語を話そうとしてくれる姿勢に、率直に嬉しいからだ。大学交流やホストファミリーの方が自己紹介だけでも、日本語を話してくれると、やはり嬉しく、笑顔になれた。私も片言の中国語で自己紹介をするのと、日本語や英語でするのでは、反応が全く異なった。このことから、いくら通訳アプリが発達しようとFACE TO FACEの場面において、相手の言語を話すことがいかに大切かを知った。だから、まずは中国語を東京オリンピックを目標にしっかり勉強していこうと思う。

次に、私が中国で学んだり感じたりしたことを日本の友人に話し、中国という国に対する日本人の理解を広げていくつもりだ。仕方がないことだが、中国に行ったことのない人は、メディアによって報じられる中国しか知らないことが多い。私が出会った中国人と言えど、せいぜい13億人分の100人いるかないかだ。これで中国のすべてがわかった気ではいるわけではないが、これまでのイメージが大きく変わった。実は私にとって中国の訪問は2回目であった。しかしながら、前回は、ただ観光地を巡るだけで、現地の人との交流はなかなか難しいものだった。しかし、今回はいつもどこかに現地の人との交流のチャンスがあり、個人で行く観光旅行では全く体験できないことが、ほとんどだった。そのおかげで沢山の現地の人と交流し、中国人という見方から、「誰々さん」という固有名詞としての見方ができるようになった。この固有名詞でつながるといことが、メディアからの表面的なイメージから、変えるのに重要だと思う。この固有名詞は相互に縦にも横にも無限に広げていくこ



とができると思う。そのための最初の糸口が、私の場合には、今、大学で学んでいる福祉であり社会保障のテーマということになるが、それに限定することなく、様々なテーマで人のつながりを広げていければと考えている。日本での友人と、中国での友人の双方のつながりから友人の輪を大きくしていきたい。最初は草の根レベルの対応しかできないが、パイプを強く大きくしながら、同時に広がりを持たせることで、次第に大きな渦を作っていきたいと思う。それこそが、我々中国派遣団の使命である。

今回の訪中は、我々が団長の言葉を借りると、始まりの終わりである。始まりという章の終わりであって、これからが肝心であるということだ。今回、結ができた人と、WeChatというツールでつながり続け、再会を果たし、さらにその友好の輪を広げていくことに尽力したい。

# 派遣を通じて得たこと

天王寺 ころろ

私は大学時代に中国語を専攻し、就職した現在も仕事で中国語を使い、中国人と日々接している。しかし、卒業後も心のどこかで、中国語を専門的に学んだ者として、もっと自由なフィールドで日中の架け橋になる活動がしたい、また中国に対する理解をもっと深めたいと思っていた。今回、第39回日本・中国青年親善交流事業の日本青年団の一員として中国各地を訪問し、中国に対する理解が深まっただけでなく、中国青年との交流など様々な体験を通じて私自身の成長にもつなげることができた。

## 1、日中国交正常化45周年記念日中青年交流フォーラムに参加して

今回の派遣プログラムはどれも印象に残るものばかりであったが、特に貴重な経験となったのは、北京滞在三日目に日中国交正常化45周年記念日中青年交流フォーラムに参加したことである。私は今回の派遣に先立ち、いくつかの目標を立てていたが、その中の一つに、政治、経済とは異なる第三の道である「文化」による交流で日中の相互理解を深めたい、というものがあつた。本フォーラムの中でも、日中友好の歴史的歩みや国境を超えた文化による交流の重要性が話し合われ、日中国青年間の交流がいつの時代も大きな役割を担っているということが分かった。また、日中友好は国家レベルの取組だけでなく、政治的なしがらみのない民間レベルでの交流が大きく貢献していると感じた。本フォーラムでは日中双方の歴史認識についても触れられていたが、日中間で交流する上でやはり歴史の勉強は必要であり、歴史について無知であることは、時として相手への失礼に当たると思った。今後も日中友好の架け橋を担う一員として、歴史的教養を身に付け、相手の文化的背景を理解することの重要性を本フォーラムで学んだ。

## 2、異文化交流を通じて得たこと

今回の派遣では、中国青年たちとの交流や施設訪問はもちろん、北京、貴州、深圳、広州の各都市の街並みや人々の様子、食文化など様々な形で異文化交流を図ることができた。

北京大学と中山大學で出会った学生たちの何人かは日本を訪れたことがあり、とても親近感を持って接してくれた。彼らとはボランティアなどについて、短時間ではあるが中身の濃い意見交換ができた。交流前は、「中

国は近くてどこか遠い国」と心の中で漠然と思っていたが、実際中国の学生たちと交流してみると、私たち日本青年と同じような価値観や考え方を持っていることが分かり、心を通わせた交流ができた。また、彼らの日本や自国に対する関心の高さに驚いた。意見交換の中で、中国のボランティアや起業制度についてこちらが質問したことにはどれも丁寧に答えてくれた。一方で、私は日本のことについて同じように質問されても返答に困ることがあり、自分の知識のなさを恥じるのが何度かあつた。他国の人々と交流をする上で、まず自国のことについて幅広く知識を蓄えておかないと、対等な交流ができないことを痛感した。

貴州では、少数民族の布依族が暮らしている好花紅村や、苗族最大の集落と言われる西江千戸苗寨を訪れ、少数民族の生活様式を垣間見ることができた。好花紅村は、政府主体の貧困脱出プロジェクトの一つとして、布依族が元々居住していた村落からこちらに移住させ、伝統的な生活様式を残したまま観光業を兼ねた村となっている。好花紅村では、布依族の方々から伝統的な歌や儀式を披露していただき、私が知っている中国文化とはまた違う文化に触れることができとても新鮮であった。しかし、この村に住んでいる布依族は、自分たちの伝統生活を見せることを観光業としているため、ある意味生活そのものが「見せ物」となっているようにも感じた。それは西江千戸苗寨を訪れた時にも同様に感じたが、観光業に力を入れるあまり、自分たちの伝統文化を「観光客受け」するパフォーマンスに加工してしまい、本来の伝統文化が失われるのではないかと少し不安も感じた。今回の派遣中にその疑問の答えが出たわけではないが、少数民族の貧困対策のあり方や、伝統文化の保全について多角的に考える良いきっかけになった。

貴州でのホームステイでは、一泊二日という限られた時間であったにもかかわらず、貴州博物館の見学や太極拳の体験など中国文化に多く触れることができる予定を組んでくださり、また食事などでは最大限のおもてなしや優しい心配りに感動した。中国に旅行しただけでは体験できない、中国人家庭の温かさに触れることができた。

## 3、中国の更なる発展を体感

今回訪れた各都市の経済発展ぶりは、私の想像を超えるものばかりであった。例えば、私は5年前に留学で北

京に滞在したことがあるが、その時と比べて北京は更なる発展を遂げていると感じた。その一つが、街中の至る所に置かれているシェア自転車である。シェア自転車の支払いはスマートフォン決済方式で、自転車に付いているQRコードを読み取れば簡単に決済ができ、安く手軽に自転車が利用できる。シェア自転車は北京に限らず、他の都市でも見ることができ、中国では急速に普及していることが分かった。道路にあふれるシェア自転車の台数には圧倒されたが、中国人の間でスマートフォン決済もかなり浸透していることにも驚かされた。スーパーでの買い物、バスや地下鉄等の交通運賃やネット通販まで、スマートフォンを持つ人々にとって、もはや現金を持ち歩くよりスマートフォン決済の方が便利で安全、という風潮を感じた。日本でもシェア自転車やスマートフォン決済は利用されているが、中国ほど浸透していないと思われる。この発展ぶりを見て、日本の方が遅れているのではと思ったが、日本では既にクレジットカードが普及しているなど、決済サービスの普及背景が異なるため、一概に日中の経済発展を比較することはできないと思った。しかし、中国の経済発展が新たな段階に来ていることは確実であり、独自の発展を続けていると感じた。

また、深圳前海地区の発展スピードも目を見張るものがあった。私たちが訪れた前海地区展示場では、深圳がどのように経済発展してきたのか、今後どのような都市を目指すのかを分かりやすく説明していただいた。深圳は、政府が中国最初の「経済特区」として指定した都市であり、40年前は小さな漁港であった町が、近年の外資企業の積極的な誘致や新興産業の推進等により、中国経済の最先端都市にまで成長した。深圳は、香港、マカオ等へのアクセスも良く、互いに経済協力を進めている。深圳が急成長した要因の一つに、若い企業の台頭と起業家への積極的な誘致が挙げられる。私たちが視察したITネットサービスを展開する騰訊会社（テンセント）や、ドローン開発で有名な大疆創新科技有限公司（DJI）は、社員の平均年齢がいずれも20代後半でありながら、今や世界を代表する大企業である。また、深圳は世界各地から起業家を誘致し、彼らが起業しやすい環境を整え、深圳の産業発展に寄与してくれるよう政府が主導となって政策を進めている。深圳の発展は、北京や上海などの他の都市にはないスピード感と若さがあるように感じた。10年後、20年後はどんな都市になっているのか、深圳の変化に注目していきたいと思った

#### 4、派遣を終えて

私は今回の中国派遣を通して、物事を多角的に見る力がついたと思う。私たちが中国各都市で訪問した場所の多くは、中国の成長や発展を象徴するようなところで

あり、いわゆる中国の“光”の部分だったと思う。私は派遣の中で、中国経済の勢いや人々がより豊かな生活を求める現代中国社会の動きを感じることができた。その一方で、少数民族の観光業化や、バスの中から垣間見えた、高層ビルの裏に隠れた今にも崩れそうな家屋やマンションなど、“光”の裏でもそこに人々が生活している光景を忘れてたくはないと思った。中国社会の“光”の部分だけでなく“影”の部分も実際に見て、多角的に考察するきっかけができたのも今回の派遣の大きな収穫だと思う。

今後は、自分が実際に見て聞いて感じたことをじっくり考察し、中国への理解を更に深めていくと同時に、身近な人たちに中国の魅力を伝えていきたい。

そして、今回の派遣事業で出会ったメンバーと共に、日中友好のために派遣の中で何ができるかを真剣に考え、互いに切磋琢磨し合えたことは、私にとってとても良い刺激となった。

この派遣事業で出会った全ての方々との縁を大切に、日中友好が「世々代々」続くよう今後も尽力していきたい。



# ディスカッション成果

平成29年度 日本青年中国派遣

## ディスカッションプログラムの概要

|        |  |
|--------|--|
| 日時     | 2017年11月15日  |
| 場所     | 北京大学   |
| テーマ    | ボランティア   |
| 参加者    | 日本青年21名、中国青年30名  |
| スケジュール | 13:00 北京大学外国語学部日本語学科の紹介<br>13:15 6グループに分かれてグループディスカッション<br>14:15 4グループによるボランティアをテーマとした発表<br>15:00 終了 |

## 成果

### 1. 中国での現状

- ・ボランティアに参加する学生は多いが、1日など短期のものが多い。
- ・内容は学習支援、老人ホームでのボランティア、赤十字でのボランティアなど様々である。
- ・1年間に8時間以上のボランティアが強制される大学もある。
- ・大学に「ボランティア募集」などの掲示チラシが多いわけではない。
- ・国内ボランティアが多い。
- ・勉強時間を割いてまでボランティアしようとは思わない。
- ・長期休みを利用してのボランティア活動が活発

### 2. 日本での現状

- ・ボランティアに参加する学生が多い。
- ・ボランティアが就職活動でのアピールポイントになる。
- ・海外ボランティアをする学生も多い。
- ・大学が、ボランティアを推進する傾向にある。
- ・2011年の震災後、より活発化した。

### 3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

Q なぜボランティアをしようと思ったのか？

A 中国側：大学生生活を充実させるため  
社会貢献のため

A 日本側：自分の関心ごとについての理解を深めるため

Q ボランティアで何が得られるか？

A 中国側：世界観が変わる  
社会貢献ができる

A 日本側：就活時のエピソードになる

自分の将来のためになる  
専門についてより知ることができる

### 4. まとめ

ディスカッションをする前は中国と日本でボランティアに関する考え方が異なると思っていたが、実際には余り違いがなかった。例えば、両国ともにボランティアは「自分がやりたいと思ってこそ行うべきもの」や「関心を持つ分野のボランティアを行う」という考え方など、社会貢献ももちろんではあるが、両国ともに自分の意思に従ってやっていることが分かった。以上のような共通点があった一方で、中国では国内のボランティア活動が多い反面、日本では海外ボランティアを行う学生も多いという相違点もあった。

|        |  |
|--------|--|
| 日時     | 2017年11月15日  |
| 場所     | 北京大学   |
| テーマ    | 起業   |
| 参加者    | 日本青年21名、中国青年30名  |
| スケジュール | 13:00 北京大学外国語学部日本語学科の紹介<br>13:15 6グループに分かれてグループディスカッション<br>14:15 2グループによる起業をテーマとした発表<br>15:00 終了 |

## 成果

### 1. 中国での現状

- ・日本に比べて起業率が高いものの、日本語学科在籍の学生たちの中では起業の話題を余り聞かない。
- ・起業は理系学生が多く、また、北京に比べ上海や深圳の方が多。
- ・成功例が多く、自分もやってみようという人が多い。
- ・職業教育の授業があり、起業に関しての情報を教えてくれる。
- ・中国では転職がしやすく、例え起業に失敗しても受け入れてくれる可能性が高い。かつ、自分のしたいプロジェクトを投資家に示せばかなり投資してくれるため、失敗してもあまり借金を負わなくてもよい。これらのことから起業を選択しやすい環境にあるといえる。
- ・公務員は安定しており中国でも人気の職業である。

### 2. 日本での現状

- ・就職では昔からある大手企業に就職することを目指す。
- ・年功序列、終身雇用の雇用システムの中で、転職することが難しいため、起業で失敗すると再チャレンジすることが難しい。
- ・起業を支援する様々なサポートは存在しているが、余り知名度が高くなくそれほど多く利用されていないのが現状である。
- ・キャリアサポートの授業は存在しているが、現状ある企業にどう就職するかが中心で、起業についてはあまり意識されていない。
- ・新しいことをしようとしても法律などが存在していてやりづらい。

### 3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

Q 中国側：日本人は就職してから一生同じ企業で働くというが、同じ仕事をしていて飽きないのか？

A 日本側：日本企業では、同じ仕事をやり続けるわけではなく転勤や配置転換という形で様々な仕事を経験をするので飽きるということは余りない。ただし若い世代ほど転職を考えている割合は高まる。

Q 日本側：中国では転職はしやすいのか？

A 中国側：しやすい。転職者は経験を持った人として優遇される。

それに対して日本では転職者は前の職場でうまくなじめなかったなど何らかの問題を抱えているのではないかと思われがちで、転職はしやすいとはいえない。

### 4. まとめ

北京は上海や深圳と比べ起業の割合は高くないということや起業に興味がない学生が多かったのが印象的だった。中国では起業による成功例が一定数あり、かつ資金も自分にリスクが少ない形で集めやすいことから起業という選択肢を選びやすく、その結果成功例が増え起業者が増えるという好循環が起きているのではないかと感じた。また、中国では起業はリスクはあるが、転職することは比較的容易なので、とりあえずやってみようという雰囲気があるのではと感じた。

|        |  |
|--------|--|
| 日時     | 2017年11月21日  |
| 場所     | 貴州省青年連行会代表との座談会（於：カルストホテル）   |
| テーマ    | 起業省  |
| 参加者    | 日本青年21名、中国青年16名  |
| スケジュール | 15:00 開会<br>15:10 起業についてディスカッション<br>15:35 ボランティアについてディスカッション<br>17:00 終了 |

## 成果

### 1. 中国での現状

中国青年2名から貴陽の青年によるイノベーションや起業について発表があった。

- ・貴陽の若者は農村で起業を行っている。貴州省では夢はあるが資金も知識もない若者にイノベーション実現のためのプランを明確化させ、資金や環境を提供している。起業に失敗したとしても貴州省ではアイデアが魅力的であれば何度でも挑戦できる。ビジネスのアイデアは宝物であり、その大部分は農村にある。都市の若者を地方に送り込み、地方の活性化を図ろうとしている。若者は民族について知ることや、民族継承やホームステイを行っている。若者は農村のいいものに自分のアイデアを加え特産品として外に売っていく。お茶や漢方薬などを売っており、理想は日本のお菓子の「白い恋人」のようになること。
- ・現在はリハビリセンターを開業している。日本の健康産業の技術力を評価している。将来的には日本の静岡医療環境センターに進出したい。中国共産党全国人民代表大会に出た議題であるが、社会の中で市民の健康に対する需要が高まっている。日中友好の一環として健康産業を促進していきたい。

### 2. 日本での現状

#### (1) 起業環境の現状

- ・開業率が4%であったが、平成27年には5.2%。
- ・日本の目標として10%と「日本再興戦略では掲げている」

#### (2) 課題について

- ・資金調達は、失敗を恐れるため9割が無借金で行っている。
- ・起業への関心はそれほど高くなく、公務員・大手企業を目指す人の割合が極めて高い。

### 3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

日本側：未来投資戦略2017というものがある。健康寿命の増進を図り、健康のまま生涯を終えるように促進している。ヘルスケア産業を展開してもらうように起業を要請している。日本は起業への意欲が少ないので是非とも合弁会社を設立してほしい。

Q 日本側：日本は人生100年時代として力を入れている。中国はIT企業が多いが、ヘルスケア産業の割合を知りたい。

A 中国側：データはない。政府が力を上げて平均寿命ではなく、健康寿命を上げていく。

Q 日本側：日本の健康産業のどこが進んでいるのか教えてほしい。

A 中国側：高齢者への福祉産業と政策の連携がとれており、サービスの質が高い。骨折を例に挙げると日本のリハビリでは手が90%使えるようになるまで、中国は手を動かせるところまでしかリハビリを行わない。中国は日本の医療を見習う必要がある。

### 4. まとめ

今回のディスカッションを通して貴州省のような内陸部において若者の起業活動をサポートする体制が充実していると感じた。その中でも、若者の農村での起業を促す具体的なシステムまで聞くことができれば良かった。ディスカッションの進め方としては日本側への質問はなく、中国側の内容の深掘りであったが、改めて、日本の医療技術の高さを実感することができた。また中国側の発表から常に日本へのビジネスチャンス伺っていたように感じた。今後、起業を通して中国のスピード感と日本の丁寧さを兼ね備えたプロジェクトができれば面白いのではないかと感じた。



|        |  |
|--------|--|
| 日時     | 2017年11月21日  |
| 場所     | 貴州省青年連行会代表との座談会（於：カルストホテル）   |
| テーマ    | ボランティア   |
| 参加者    | 日本青年21名、中国青年16名  |
| スケジュール | 15:00 開会<br>15:10 起業についてディスカッション<br>15:35 ボランティアについてディスカッション<br>17:00 終了 |

## 成果

### 1. 中国での現状

- ・貴州省青年連合会は50余りの農村で教育のボランティア活動を展開した。
- ・若者が貴州省の豊かさに貢献していくことが必要。今回の一泊二日ホームステイの中で貴州大学は有償ボランティアを行った。
- ・具体的には、貴州省のみならず全省の農村の学校への教育ボランティアとして、農村の子供たちと交流し、感情を共有すること、親が出稼ぎに行ってしまう留守番をしている子供と一緒にいてあげることを通して、彼らの精神的、身体的健康を支える活動がある。
- ・貴州省の出稼ぎ者の数は105万人であり、親と一緒に生活できない留守児童が多くいる。そのため精神面のケアが必要である。
- ・ボランティアをするというのは、自ら行う場合もあれば、ほかの団体と協力して行うこともある。ボランティアが起業につながる場合もある。
- ・政府計画の中に、大学生に農村で起業してもらうことを国が奨励するものがある。これは、若い世代が地元で起業をしていくようにするためであり、政府は2、3年間ボランティアを行ってこのような学生を優先的に採用する。このような若者は現場で能力を鍛え経験を持っているため採用されやすく、国から給料が出て就職活動への支援にもつながる。国が財源を投入するおかげで、多くの大学生が起業するようになった。
- ・雇用のチャンスが増えた。中国の西部で行うプロジェクトなどのボランティアをすることにより、大都会での就職ができなかった場合でも、ある程度の社会経験を持っているので改めて起業がいいのか、就職がいいのか考えるようになり、就職難の解決につながる。

### 2. 日本での現状

- ・教育のボランティアは中国と日本で似ている点がある。日本青年の一人が経験したボランティアについて以下のとおり説明した。
- ・東京の中で比較的貧しい地域があり、経済的に困難な子供たちに居場所と学習スペースを提供するボランティアがある。夕食や遊び場を提供する、一緒に食事を作るなど、家庭での学びもできるようにする。このボランティアでは、日本の大学生は給料をもらわない。

### 3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

中国でも国家プロジェクトを除き学生には給料がない。

Q日本側：中国でもごみ拾いなど、子供と一緒にボランティアをすることはあるか？

A中国側：ある。子供たちが自分たちで環境保護などに参加してくれる。

Q日本側：誰が子供にボランティア活動を勧めることが多いか？

A中国側：主に親や学校からであるが、年齢が高くなると、自分から参加するようになる。

Q中国側：日本側のボランティアを行う期間と比べると、中国側は短い。どうしたら持続的にボランティア活動ができるか？

A日本側：国際ボランティアや地域のボランティアなどを行っているNPOなどの団体に参加すれば自然に持続でき、また団体に入らなくても、趣味に関連するボランティアをして楽しいと思えば持続できる。また、東北のボランティアでは、学生団体で行くため、同じようなことをしている団体との学生同士の交流が広がる。

ボランティアを行いたいと思って始めたわけではない人もいる。しかしボランティア内容が毎回同じものとは限らないため、需要に合わせて飽きずにボランティアをすることが持続につながる。例えば、東日本大震災が起こった宮城県気仙沼市に大学として40人派遣し、学生団体がボランティアをやっている。気仙沼大島では島民が3500人に減り、船が破損し、観光業に対しても多大な被害があった。2011年から現在まで、大島に対してのボランティア内容は変わってきている。始めは瓦礫の撤去作業がほとんどだったが、更地になった後は地域活性化に関わっており、地方の観光業界と連携できるようになった。何かしてあげたいというボランティアの当事者意識が生まれたことが一番大きい要因である。活動の報告を現地で行うことによって、その報告を聞いた学生が新たにボランティアに参加するようになった。

Q 中国側：毎年夏休みに高校や大学生が一对一で法律や医療などの問題に関わるボランティアがあり、貴州だけではなく各省で起きている問題に関わる機会があふれている。この成果として、今年参加者の大学生が2万人に達した。全国からチエンチンイーツイ（若者のエリートという意味）という知識理論の優秀な人が選ばれて行うボランティアは日本でもあるのか？あるとしたら参加人数はどのくらいか？どのような分野か？

A 日本側：日本ではそのようなものではない。人数のデータは今、持ち合わせていない。日本のボランティアは、自然体験、知的・身体障害者分野、高齢者のための分野などがある。高齢者であれば、合唱や演劇で高齢者を慰めるものや、地元の道路などの掃除、また、資格が要るものや、様々なトラブルの相談役として中間に立つものなどがある。日本は自然災害が多いので、壊れた建物を片付けるといった天災被害に対しての支援などを地方自治体、NPO、任意団体、経費を持った法人が支援を募集し行われる。交通費や昼食を出してもらえるとというものもある。

#### 4. まとめ

中国と日本には共に若者を対象とするプロジェクトがあり、その目的は中国では若者の起業への意識向上と就職活動支援、日本では若者の当事者意識、学生団体のコミュニティの形成であることが分かった。両国ともボランティアをすることの需要は高いと思われ、今後両国の発展のためには欠かせないものである。特に中国でのボランティアは、中国政府から支援をもらい問題解決に貢献できるほどの国家プロジェクトとなっているものがあることを学べた。

|        |  |
|--------|--|
| 日 時    | 2017年11月24日  |
| 場 所    | 中山大学   |
| テーマ    | ボランティア   |
| 参加者    | 日本青年8名、中国青年4名（グループ①）   |
| スケジュール | 14:15 開会<br>14:30 王博士による起業についての発表<br>14:55 周博士によるボランティア、「Blue Letter Project」についての発表<br>15:25 グループごとでのディスカッション（計3グループ）<br>16:00 終了 |

## 成 果

### 1.中国での現状

- ・ 広東語が分からない観光客など広東語圏以外の人に、広東語を教えるという活動がある。
- ・ 今回のような日中交流のために日本人と交流することもボランティア活動の一環である。また、外国人のために申込書を書くという活動も行っている。
- ・ ボランティア活動をする時間が少ないと、先生から進学のための推薦状をもらうことができないということもある。
- ・ 孤児や栄養が足りない子供たちへの母乳の寄付というボランティアもある。病院で母乳がまだ出る方から母乳を寄付していただき、倉庫のような所で保管している。

### 2. 日本での現状

- ・ 日本に来ている外国人労働者の中には日本語ができない方がいるため、日本語を教えるボランティアをしている。
- ・ 0～2歳の子供を持つ親が集まる場所を提供するボランティアをしている。子育てのための意見交換を行えるようするため。
- ・ 東日本大震災の復興支援で、瓦礫撤去のボランティアをした。
- ・ 交換留学生へ日本語を教えるボランティアをした。

### 3. 上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

- ・ 東日本大震災の復興支援で、瓦礫撤去のボランティアをした。

Q 中国側：危なくないのか？

A 日本側：震災後の1週間で行ったが、二次災害が起きないように政府が配慮しているため危なくはない。

Q 日本側：ボランティアをする目的は何か？

A 中国側：大学や建物の歴史を伝えるため、新しい友人を作るため。

### 4. まとめ

中国でも日本でも多くの種類のボランティア活動があることが分かった。このグループ内では言語に関するボランティアと子供に関するボランティアが多かったが、各国の問題や特徴が垣間見えるボランティアの内容であったように感じられた。



## 中山大学ディスカッション ボランティアグループ感想

中山大学からの説明によると、中山大学では学生5万5千人のうち2万7千人がボランティアへ登録しているという。昨年は52のボランティア学生団体が100万時間を超える活動をし、労働・教育・救済・医療・観光など様々な分野で活躍している中山大学の学生と交流ができることに感激し、今回のディスカッションは始まった。

始めに中山大学側の代表者による起業とボランティアについてのプレゼンテーションを聞いた。中でも興味を持ったのは、起業コンテストだ。これはキャンパス内でも盛んで、受賞すると1000万元くらいの融資を受けられる仕組みになっている。今までに中山大学からは3チームが起業に成功しており、新しい技術とアイデアをうまくつなぎ合わせて、新しいものを生み出していることに感嘆した。またボランティアに関しては、留守児童へ手紙を書き心の問題を解決する活動について知ることができた。この効果で、子供たちは親孝行したい、先生に感謝を伝えたい、友達を大切にできるよう優しくなりたい、人を助けたいといった感情の変化を生み出し、その結果、彼らが社会、国へ貢献し国益につながると感じた。

その後、グループでも中国青年、日本青年のボランティア活動について順番に語った。この児童を励ますような内容のボランティアをWeChatでも行うなど、オンラインを使うことでコスト削減をしているものもあれば、オンラインでの募金活動、高齢者にスマートフォンの使い方を教えるもの、「5時学校」という幼稚園が終わった後も子供を預けることができる母親の役に立つ学校、「母乳倉庫」という栄養不足の子供に、母乳の出ない母親に代わって出る親の母乳を寄付するもの、広東語を教える、日本人と一緒に遊ぼうという触れ合い広場、日中友好への活動などがある。中には50時間以上のボランティアを二つ行えば奨学金をもらえるために頑張る学生もおり、日本人の自分も見習うべきだと感じた。このように、中国の学生は、ボランティアを積極的に行っていることを知った。

中国はトレンドに従う特徴がある。まず世界で何が起きているか、世界ではどのような問題が起きているのかを自分なりに見つけ、自分はその解決のために何ができるかを考えて起業する。このようなディスカッションを通して青年同士互いのアイデアや個性を引き出し、新しい価値観を共有することは、新しい友好への道の一步を生み出すものになると感じた。



|        |   |
|--------|---|
| 日時     | 2017年11月24日   |
| 場所     | 中山大学  |
| テーマ    | 起業  |
| 参加者    | 日本青年7名、中国青年3名（グループ②）  |
| スケジュール | 14:15 開会<br>14:30 王博士による起業についての発表<br>14:55 周博士によるボランティア、「Blue Letter Project」についての発表<br>15:25 グループごとのディスカッション（計3グループ）<br>16:00 終了 |

## 成果

### 1. 中国での現状

- ・中山大学5万5千人の学生のうち、ボランティア団体に登録しているのが2万7千人。  
総ボランティア活動時間は、去年だけで100万時間を超えている。
- ・大学には52の学生ボランティア団体があり、300余りのボランティアチームが活動している。
- ・大学内ではイノベーションを推進しており、起業コンテストへの参加を促すこともしている。
- ・中国ではトレンドを大切にしており、時と場合に応じたニーズを踏まえて行動する。

### 2. 上記現状をふまえた上での意見交換の内容

- ・収穫のあるもの+公益のため  
→ただ利益を得るだけではなく、それを公益に結び付けること。それはボランティアでも起業でも変わらないという中国人が持っているポリシー。
- ・アクセサリを作り、販売し、売り上げの半分を寄付するボランティア  
→中国の考えとしては「まだ足りない」。

例えば、

- ・その作業を仕事のない人に提供することで、彼らの雇用にも貢献することができる。
- ・アリペイはポイントが貯められるが、そのポイントが貯まる度に会社が植林をするなどのように自身の利益と公共の利益が同時に存在しているべき。

Q 日本側：起業において最も大変なことは何か？

A 中国側：両国ともに資本や資金の面が影響すると考えられる二つの大きな問題があり、一つは起業するための場所の確保、2点目は起業するための人手の確保である。中国では1点目の起業するための場所の確保の問題の解決に政府が取り組んでいる。

A 中国側：政府の支援により、良いアイデアさえあれば起業家は無料で場所を確保することができる。またベンチャーキャピタルとは異なり、特に返すべき借りはなく、サービスとして提供されるため、家賃等の心配がない。

A 中国側：2点目の問題、人手に関しては、学生起業家の場合は同じ大学の仲間に声を掛け、共同で立ち上げることもある。

### 3. まとめ

ボランティアをするとき、日本青年は「自分たちが誰かのために何かをする」ということを考えて行動している。それに対して中国青年は更に広い視点で物事を見ているように捉えられる。誰かのためだけでなく、もっと大きなことのためにも何ができるのか、という視点は、日本側にとって大きな衝撃だった。また、大学自体が起業を促進していることや、政府による支援を受けられることが中国における起業の強みである。新しいアイデアを形にするために、国自体が積極的な発掘や支援を行うことが大きく影響している。

## 中山大学ディスカッション 起業グループ感想

中国青年4名、日本青年6名で「起業」をテーマに話し合った。中でも、中国での具体的な起業プロセスと起業に対する考え方についての話が印象的であったので、その2点について記述する。

中国での具体的な起業のプロセスについて、実際に医療分野で起業経験のある王さんが説明してくれた。中国はトレンドを重視するので、まずは世の中のニーズや現状を理解する。教育の機会が不平等という現状を見付けて、自閉症の子供を教育するというアイデアが浮かんだ。それを実現するために協力してくれる仲間を探したそうだ。仲間を見つけた後、会社を起こすに当たりオフィスを構える必要があるので、政府が行っている「場所を無料で提供する」という支援を受けた。その後の資金調達は自力で行い、何とか会社を立ち上げたそうだ。事前研修や中国訪問中にも、中国政府は若者が起業することを推奨しておりサポートも手厚いという趣旨の話を多く伺っていたので、起業が成功するまで金銭的なサポートを行うと思っていた。しかし王さんは、「政府のサポート資金はわずかだ、他は融資に頼らなくてはいけない」と語っていた。中国の学生は失敗のリスクについて考えるのではなく、まず行動するというスタイルなのだと感じた。

起業の考え方については、中国の学生はビジネスを行う際、「多くの人を巻き込むこと」、「社会に貢献できる

こと」をキーワードにしていると感じた。日本青年の中に、ボルネオ島支援ボランティア活動を行っている学生がいた。そのボランティア活動の内容はボルネオ産パールのアクセサリーの制作・販売を行い、利益をボルネオ島に還元するというものである。中国人の学生はそのボランティアを起業すると仮定して、中国ではこうしたらビジネスになるという、ノウハウを教えてくれた。彼が特に指摘したのは、「学生が作る」ということの問題点だ。地域の老人や仕事のない人に作ってもらうことで、周りを巻き込むことができる。また、雇用の場を提供するという意味で社会にも貢献できるという趣旨のことを話していた。「ただ売るだけではなく、社会とのつながりを見出さなくてはいけない」と強調していた。

中山大学の学生は北京大学の学生に比べて「起業」について関心を抱いている学生が多いように感じた。それは深圳で見学したような「前海深港青年夢工場」や「前海地区展示場」など環境も整っており、かつ香港が近く海外からの起業家も集まる土地柄があり、競争力も高まることに起因しているのだろう。実際に起業経験のある王さんの話はとても説得力があり、非常に勉強になった。起業家のための施設等の見学のみならず、実際に学生から起業のエピソードを聞いたことで、より中国の起業に対して理解を深めることができた。



|        |  |
|--------|--|
| 日 時    | 2017年11月24日  |
| 場 所    | 中山大學   |
| テーマ    | ボランティア   |
| 参加者    | 日本青年6名、中国青年3名（グループ③）   |
| スケジュール | 14:15 開会<br>14:30 王博士による起業についての発表<br>14:55 周博士によるボランティア、「Blue Letter Project」についての発表<br>15:25 グループごとでのディスカッション（計3グループ）<br>16:00 終了 |

## 成 果

### 1.中国での現状

- ・中山大學には50以上の団体があり、短期的な活動を含めると300以上ものボランティアチームが存在する。
- ・中国では大學レベルの教育を受けた人でなければボランティアを行おうという意識が起きない。
- ・将来への経験のためにボランティアを行っている人もいる。
- ・吉林大學では奨学金を得るために1年間でボランティアを30時間行わなければならない。
- ・中国では古くから献血は身体に良くないと言われているが、ボランティアの精神から中国では献血が盛んに行われている。

### 2.日本での現状

- ・小学生から學校でボランティアが日常的に行われている。
- ・日本では日常的に行われているので余り意識せずにボランティアを行っている。
- ・日本では時間が十分あるのでボランティアに参加している人が多い。
- ・日本では有償のボランティアがある。

### 3.上記現状を踏まえた上での意見交換の内容

- ・献血の内容などは日本も中国もほとんど同じ。
- ・日本も中国も将来の経験を得るためにボランティアを行っている。
- ・自らのスキルを上げるために、毎日ブースを作り、電気の修理などを無料で請け負う。また、貧困地方へ出向き無料で修理を行っている。
- ・日本では有償であろうと無償であろうと人を助けることはボランティアとみなされる。しかしながら中国では有償のボランティアはボランティアとみなされないことが多い。

### 4.まとめ

- ・ボランティアに対する考え方などは相違が余りないように感じた。
- ・日本、中国とも自分のスキルアップのためにボランティアを行っている人もいる。
- ・中国では有償のボランティアは、ボランティアであるとあまり認識されていない。
- ・中国では大學での奨学金を得るためなどにボランティアをする必要がある。
- ・中国では古くから献血は身体に良くないと言われているが、ボランティアの精神から献血が盛んに行われている。



# 中山大学ディスカッション ボランティアグループ感想

天王寺 ころ

## 「ボランティアに対する日中青年の共通認識」

私は、学生時代にボランティア活動を経験したことがあることから、出発前研修のディスカッショングループでボランティアを選択し、日本のボランティア事情についての下調べを行っていた。同じグループのメンバーも、過去に様々なボランティアを経験していることが分かったが、一方で、そもそも中国ではボランティア活動は一般的に行われているのか、現地の大学生とボランティアについて話が広がるのか、正直少し不安であった。しかし、北京大学、中山大学の両方でディスカッションテーマの一つが「ボランティア」であったことから分かるように、中国でも様々なボランティア活動が盛んに行われ、私たちが思っている以上にボランティアに対する関心が高いと感じた。

中山大学でのディスカッションの序盤、中国側の学生が自らのユニークなボランティア活動を紹介してくれた。それは、母乳のドナーを募るボランティアである。早産などで母親の母乳が出ない赤ちゃんのために、ドナーの母乳を提供する支援をしている、とのことであっ

た。この話は私たち日本側にとってとても新鮮な話であり、中国では学生ボランティア活動が多岐に渡っていることが分かった。その話をしてくれた学生を始めとして、他の学生たちも英語を教えるボランティアや、電気修理のボランティアなど、様々な活動をしていることを教えてくれた。また、ボランティアをする理由としては、自分の興味があるから、就職活動や将来の仕事に役に立つと思うからなど、私たち日本側と同じような意見であり、ボランティアに対する意識は似ていると感じた。

中山大学では多くのボランティアサークルがあり、大学側も奨学金の支給条件としてボランティア活動時間を定めており、ボランティアを重要視していることが伺えた。

このディスカッションを通して、中国の学生も積極的にボランティア活動をしていることを知り、とても刺激を受けた。また、ボランティアに対する意識は日中で共通するところがあると分かり、有意義な意見交換ができたと思う。

